

安曇野市の埋蔵文化財第20集

三枚橋遺跡 7

店舗建設に伴う第7次発掘調査報告書



2020.3

安曇野市教育委員会

安曇野市の埋蔵文化財第20集

三枚橋遺跡 7

店舗建設に伴う第7次発掘調査報告書



2020.3

安曇野市教育委員会

表紙写真

試掘調査出土須恵器坏蓋

裏表紙写真

発掘調査区遠景（東から）



1 調査地遠景（上が西）



2 調査区全景（上が西）



3 調査区西壁基本土層



4 出土遺物（左上3点：三枚橋遺跡第7次発掘調査出土 その他5点：試掘調査出土）

序

安曇野市の埋蔵文化財は、この地域の歴史を理解するためにかけがえない市民共有の財産です。安曇野市教育委員会では、埋蔵文化財の発掘調査等を通じて得られた、地域の歴史資料の蓄積及び調査結果の公開普及に努めてまいりました。

本書では、平成30年度に店舗建設に際して実施した、三枚橋遺跡第7次発掘調査の成果をまとめました。この遺跡では、穂高町教育委員会が5次にわたる発掘調査を、安曇野市教育委員会が第6次発掘調査を実施しており、これまでに弥生時代及び奈良から平安時代の集落跡を確認しています。第6次までの発掘調査で、弥生時代及び奈良から平安時代にかけての建物跡が多数確認されていて、この地域での集落の繁栄をうかがうことができます。

本書に掲載した第7次発掘調査は、第3次発掘調査と同じ調査地で実施し、奈良時代の建物跡を確認しました。この中で、建物跡のうち1棟は、第3次発掘調査で発見された建物と一致する可能性が高いことが判明し、この地域の集落の様子が、またひとつ明らかになったと言えます。

末筆となりますが、本書をまとめるにあたり、多くの皆様、諸機関にご協力とご指導を賜りました。この場をかりて、厚く御礼申し上げます。

本書掲載の調査成果が多くの市民に活用され、広く安曇野地域の歴史・文化の解明に役立つことを祈念し序といたします。

令和2年(2020)3月

安曇野市教育委員会
教育長 橋渡 勝也

例言

- 1 本書は、長野県安曇野市に所在する、三枚橋遺跡第7次発掘調査の報告書である。
- 2 本書掲載の調査は、安曇野市教育委員会が実施し、有限会社 F&S が費用負担した。
- 3 本書の編集は、安曇野市教育委員会教育部文化課が行った。執筆は横山幸子が担当し、山下泰永が統括した。
- 4 出土資料の自然科学分析は、株式会社加速器分析研究所に業務委託した。
- 5 本書で使用した主な引用・参考文献は、巻末に一括して掲載した。ただし、第7章では章末に掲載した。
- 6 本書掲載の調査に関する出土遺物及び事務書類、記録類は安曇野市教育委員会が保管している。
- 7 調査全般にわたり以下の方々から、ご指導・ご協力をいただきました。(敬称略・五十音順)
大澤慶哲、白鳥章、原明芳、深澤恒則、細尾みよ子、百瀬新治、山田真一

凡例

- 1 発掘調査及び整理作業に際し、調査略号として遺跡名のアルファベットと調査年度（西暦2018年）の組み合わせである次の表記を、遺物注記等に使用した。
三枚橋遺跡第7次発掘調査：SMB18
- 2 調査及び本書での遺構名は、次の略号を使用している。
SI：堅穴建物跡 SL：焼土 SP：ピット NR：自然流路
- 3 遺構・遺物の法量の表示で、残存箇所のみを計測した場合は（ ）で示した。
- 4 本書実測図で遺物は次のように表現した。また、縮尺は各図に示した。
土師器：断面無地 須恵器：断面黒 灰軸陶器：断面灰色
- 5 土器の記載では、円筒形土器を除き、器形について「形土器」の表記を省略した。
例 甕形土器：甕
- 6 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 7 本書では、平成17年（2005）10月1日の町村合併より前の旧郡名・旧町村名について「旧」を省略し、「南安曇郡」、「穂高町」のように表記した。
- 8 本書掲載の地形図は個別の記載のない場合、安曇野市都市計画基本図（1/2500）を基図とし、調製したものである。
- 9 文献引用等に際し、各機関の名称を以下のように省略した。
埋蔵文化財センター：埋文セ 教育委員会：教委 編纂委員会：編纂委

目次

序

例言・凡例

目次・挿図目次・挿表目次・写真目次

第1章 調査の契機と経過	1
1 調査の概要	1
2 調査の契機と事業計画の概要	1
3 調査の経過	2
4 試掘調査	3
5 調査体制	5
6 発掘作業・整理作業の経過	5
7 調査日誌抄	5
第2章 遺跡の位置と環境	6
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	6
3 三枚橋遺跡の概要	8
第3章 調査の方法	10
第4章 層序	13
第5章 遺構	16
1 竪穴建物跡	16
2 焼土	17
3 ビット	17
4 自然流路	18
第6章 遺物	21
1 第7次発掘調査	21
2 平成29年度試掘調査	22
第7章 自然科学分析	26
1 放射性炭素年代(AMS測定)	26
第8章 調査の総括	29
1 堆積状況と遺構	29
2 遺構と遺物	30
写真図版	33
引用・参考文献	38
調査報告書抄録	

挿図目次

第1図 調査地位置図.....	1	第13図 SI2.....	19
第2図 試掘調査トレンチ配置図.....	3	第14図 SL1.....	19
第3図 試掘調査土層概念図.....	4	第15図 SP3・SP4・SP5・SP6・SP7・SP8 ・SP9.....	20
第4図 試掘調査Bトレンチセクション図.....	4	第16図 第7次発掘調査出土土器.....	23
第5図 三枚橋遺跡付近の遺跡.....	7	第17図 試掘調査出土土器.....	24
第6図 三枚橋遺跡発掘調査区配置図.....	9	第18図 分析試料.....	28
第7図 グリッド配置図.....	11	第19図 暦年較正年代グラフ.....	28
第8図 調査区全体図.....	12	第20図 三枚橋遺跡周辺の古代の遺構深度.....	31
第9図 基本層序.....	13	第21図 第3・7次発掘調査区、 試掘調査トレンチ配置図.....	32
第10図 東壁、西壁セクション図.....	14		
第11図 工事立会焼土確認箇所.....	15		
第12図 SI1.....	18		

挿表目次

第1表 事務手続き経過.....	2	第7表 第7次発掘調査出土土器観察表.....	23
第2表 三枚橋遺跡付近の遺跡.....	7	第8表 試掘調査出土土器観察表.....	25
第3表 三枚橋遺跡発掘調査履歴.....	8	第9表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值).....	27
第4表 遺物注記.....	10	第10表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、 暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代).....	27
第5表 土層注記.....	15		
第6表 器種分類.....	22		

写真目次

1 調査区全景 (上から西).....	33	12 SL1 検出 (上から東).....	36
2 調査区全景 (北から).....	33	13 SL1 セクション (西から).....	36
3 調査区全景 (西から).....	34	14 SL1 完掘 (西から).....	36
4 完掘状況 (北東から).....	34	15 SP3~9 (南から).....	36
5 完掘状況 (南西から).....	35	16 工事立会時土層 (東壁).....	36
6 調査前 (西から).....	35	17 調査後現況 (東から).....	36
7 基本土層 (西壁).....	35	18 出土遺物.....	37
8 SI1 完掘 (南から).....	35		
9 SI1 断面 (東から).....	35		
10 SI1 遺物出土状況 (北から).....	36		
11 SI2 断面 (東壁).....	36		

第1章 調査の契機と経過

1 調査の概要

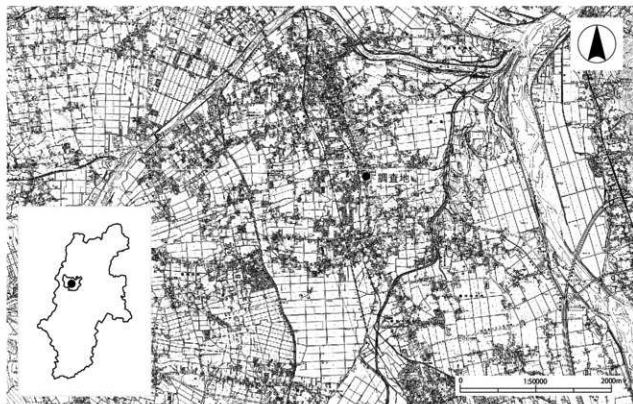
三枚橋遺跡第7次発掘調査

所在地	安曇野市穂高 1800 番 2 外 5 筆
調査面積	90㎡
発掘作業	平成 30 年 (2018) 10 月 19 日 (金) ~ 平成 30 年 (2018) 10 月 31 日 (木)
整理作業	平成 30 年 (2018) 11 月 1 日 (木) ~ 令和 2 年 (2020) 3 月 31 日 (火)
調査契機	店舗建設

2 調査の契機と事業計画の概要

三枚橋遺跡第7次発掘調査の調査原因となった事業は、民間事業者による店舗建設である。新築建物は、建築面積 371.96㎡の鉄骨造平屋建である。事業地は従前、別の店舗が建設されており、平成 7 年 (1995) の建設時には、穂高町教育委員会が三枚橋遺跡第3次発掘調査を実施している。第3次発掘調査では、旧店舗の基礎部分を調査範囲としていた。今回の事業計画における主な掘削は、新規建物基礎設置箇所、ロの字型をとる。このうち、北側、西側、南側は旧店舗の基礎と重複するため、東側の基礎部分が新たな掘削となる。

事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、第3次発掘調査で遺構等が発見されていることから、保護協議を実施するとともに、安曇野市教育委員会が試掘調査を実施し、埋蔵文化財の存在を確認した。



第1図 調査地位置図

3 調査の経過

三枚橋遺跡第7次発掘調査は、店舗建設に伴う緊急発掘調査である。この遺跡では、これまでの調査では、弥生時代、奈良～平安時代の集落跡を確認しているため、平成29年(2017)12月5日に敷地内で文化財保護法第99条に基づき試掘調査を実施した(安曇野市教委2019)。試掘調査の結果、地表下約50cmで奈良～平安時代の遺構・遺物を確認し、本件工事での掘削による埋蔵文化財への影響は不可避であることが判明したため、記録保存のための発掘調査を実施した。

第1表 事務手続き経過

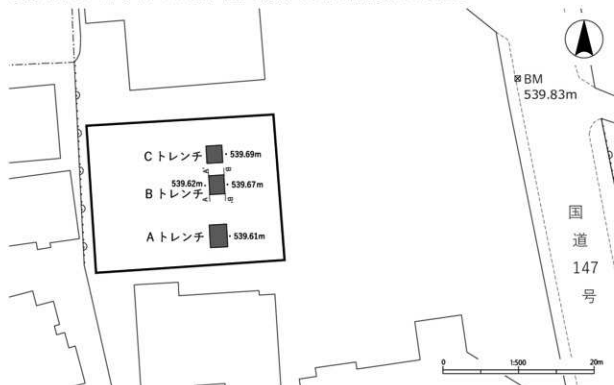
	年月日	文書番号	内容
1	平成29年11月27日	29文第1427号	平成29年10月16日付け試掘依頼を受け、市教委にて文化財保護法第99条に基づき試掘調査実施を決定する。
2	平成29年12月5日	—	上記1の試掘調査を実施。
3	平成29年12月8日	29文第1499号	上記2の試掘調査にかかる「発掘調査終了報告書」を市教委教育長から県教委教育長へ提出する。
4	平成30年10月15日	—	「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出」(文化財保護法第93条)が事業者から市教委へ提出される。
5	平成30年10月15日	30文第1308号	上記4通知を「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出について(三枚橋遺跡)」にて、市教委教育長から県教委教育長へ進達する。
6	平成30年10月16日	30教文第7-1158号	「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」にて県教委教育長から、記録作成のための発掘調査の指示通知が発出される。
7	平成30年10月17日	—	上記6通知を市教委にて受理する。
8	平成30年10月19日～ 平成30年10月31日	—	発掘調査を実施する。
9	平成30年11月1日	30文第1430号	「埋蔵物発見届」を市教委教育長から安曇野警察署長へ提出する。「埋蔵文化財保管証」を市教委教育長から県教委教育長へ提出する。
10	平成30年12月6日	30文第1577号	「発掘調査終了報告書」を市教委教育長から県教委教育長へ提出する。
11	平成30年11月12日	30教文第20-64号	「文化財の認定及び県帰属について(通知)」が県教委教育長から発出される。
12	平成30年11月12日	30文第1503号	上記11の通知を市教委にて受理する。
13	令和元年6月25日	1文第734号	「出土文化財譲与申請書」を市教委教育長から県教委教育長へ提出する。
14	令和元年6月27日	元教文第24-7号	上記13の譲与申請に対して「出土文化財の譲与について(通知)」が県教委教育長から発出され、譲与が承認される。
15	令和元年7月1日	1文第840号	上記14の通知を市教委にて受理する。

4 試掘調査

今回の店舗建設地では、平成7年(1995)に、旧店舗建設時に、建物基礎部分において穂高町教育委員会が三枚橋遺跡第3次発掘調査を実施し、奈良～平安時代の堅穴建物跡を確認している。このため、平成29年(2017)12月5日に、安曇野市教育委員会が文化財保護法第99条に基づく試掘調査を実施した(安曇野市教委2019)。

試掘調査では、敷地内に3箇所のトレンチ(A～Cトレンチ)を設定して土層観察及び遺構・遺物の検出を試みた。いずれのトレンチでも、地表下20cm以深では、シルト層、砂層、礫層が良好に残存していた。Bトレンチでは地表下約50cmの深度で、シルト層を掘り込む遺構を確認し、地表下80cm付近では焼土を検出した(第4図)。Aトレンチ、Cトレンチでは遺構は検出できなかった。

また、Bトレンチでは、奈良～平安時代の須恵器、土師器が出土したため、資料化して詳細を第6章に掲載した。Aトレンチ、Cトレンチでは、土器の破片がわずかに出土したのみである。

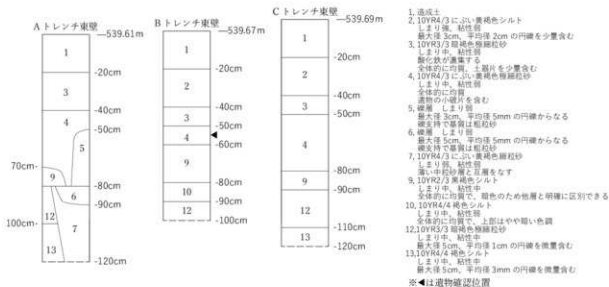


Bトレンチ西壁

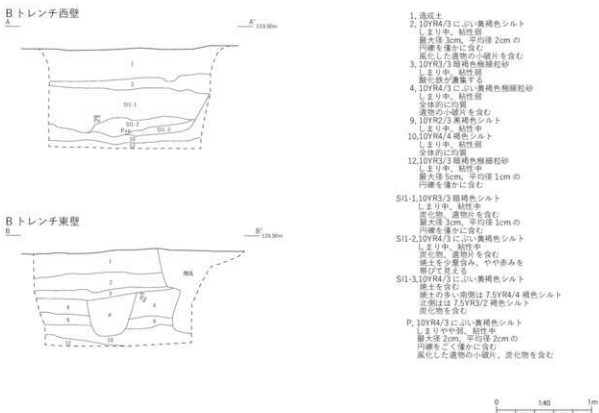


Bトレンチ東壁

第1章 調査の契機と経過



第3図 試掘調査土層概念図 ※層名は第7次発掘調査と共通



第4図 試掘調査Bトレンチセクション図

5 調査体制

調査主体 安曇野市教育委員会

	平成29年度	平成30年度	令和元年度
事務局	教育部 文化課	教育部 文化課	教育部 文化課
文化課長	那須野雅好	那須野雅好	那須野雅好
文化財保護係	山下泰永（課長補佐兼係長） 土屋和章、横山幸子	山下泰永（課長補佐兼係長） 土屋和章、横山幸子	山下泰永（課長補佐兼係長） 土屋和章、横山幸子
調査員	横山幸子、土屋和章、松田洋輔	横山幸子、土屋和章、白鳥章	横山幸子、土屋和章
作業参加者	田多井智恵、勝野辰雄	小穴金三郎、勝野辰雄、 木村隆一、等々力哲男、 三澤俊秀、田多井智恵、宮下智美	田多井智恵、宮下智美、 望月裕子、佐藤真弓
内容	試掘調査	発掘作業、整理事業	整理事業、自然科学分析（炭化物）

6 発掘作業・整理事業の経過

三枚橋遺跡第7次発掘調査における現場での発掘作業は、平成30年（2018）10月19日（金）～平成30年（2018）10月31日（水）に実施した。詳細は、調査日誌抄として後述する。

整理事業は、平成30年（2018）11月1日（木）～令和2年（2020）3月31日（火）に実施し、本書を発行し全事業を終了した。整理事業においては、遺物の洗浄を平成30年度中に終了し、令和元年度は注記、遺物接合、図版整理、遺物実測図作成、写真撮影及び報告書作成を行った。

7 調査日誌抄

平成30年（2018）

10月19日（金）	機材等搬入。	10月26日（金）	SI1 完掘。SI1-P1 実測。サブトレンチ2、3を設定、サブトレンチ3のセクション実測。作業員作業終了。
10月22日（月）	重機による表土除去開始、完了。SL1を検出。	10月29日（月）	サブトレンチ4を設定、セクション実測。ビット5基の検出開始。
10月23日（火）	調査区グリッドを設定。作業員作業開始。SI1、SI2を検出。SI1にベルト設定、掘り下げ。SI1南東部からまとまった土器が出土。	10月30日（火）	ビット5基の検出終了、平面実測。調査区全体の空撮。重機による埋め戻し開始。
10月24日（水）	調査区東壁、西壁、SI1 精査。西壁にビット2基を検出。東壁とSI1のセクション実測。	10月31日（水）	重機による埋め戻し完了。機材等撤収。現場引き渡し。
10月25日（木）	西壁のセクション実測。SI1 床面にビット1基を検出。SL1のセクション実測。サブトレンチ1を設定。		

第2章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

安曇野市を含む松本盆地は長野県のほぼ中央にあたり、西を標高2,000m超の飛騨山脈に、東を標高1,000m程度の筑摩山地に画される。安曇野市は盆地の中央付近、松本市街地から北西に10km程度の距離に位置する。安曇野市内で現在の集落が分布する範囲は、飛騨山脈山麓の標高700m付近から、安曇野市北東部の生坂村との境界地点の標高500m付近までで、標高差にして約200mの範囲である。

安曇野市内を流れる主な河川としては、高瀬川、烏川、穂高川、黒沢川、犀川が挙げられる。盆地北部から南流する高瀬川と、安曇野市北部において東流する穂高川、盆地南部から北流する犀川の三川が、安曇野市明科地域で合流し、犀川丘陵内を生坂村、大町市八坂、長野市信州新町を経て長野盆地へ流入する。盆地西側ではこれらの水系に合流する中房川、烏川、黒沢川などの扇状地が発達し、大規模な扇状地群を形成している。

三枚橋遺跡の所在する安曇野市穂高地域は、安曇野市の北部に位置する。平地の大部分は、飛騨山脈から東流する烏川の扇状地で、扇頂付近には縄文時代の遺跡や古墳が分布する。扇状地内では、縦堰と呼ばれる、自然流を利用した用水路が西から東へ鳥趾状に広がっている（小穴1987）。縦堰の流下する扇尖～扇端には、主に古墳～平安時代の遺跡が立地し、弥生時代の遺構も確認されている。三枚橋遺跡周辺には、穂高沢、柏原沢といった主要な縦堰が存在し、三枚橋遺跡第7次発掘調査の調査地の北側約40mの位置には、柏原沢から分流した大坪沢が東流する。小穴喜一は、穂高沢、柏原沢周辺で古墳や土師器・須恵器を伴う多くの遺跡が発見されていることから、古代～中世に、これらの縦堰を軸に水田開発が進んだと考察している（小穴1987）。

2 歴史的環境

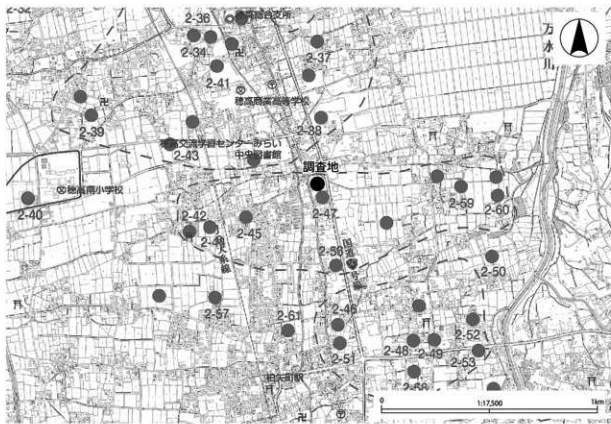
三枚橋遺跡の所在する安曇野市穂高地域における遺跡は、『穂高町誌』にまとめられている（穂高町誌編集委1991）。『穂高町誌』によると、穂高町に所在する遺跡数は、縄文時代39、弥生時代6、古墳時代（古墳そのものは除く）10、奈良時代2、平安時代28、中世3を数える。三枚橋遺跡の所在する穂高矢原・白金地帯は、広い範囲で遺跡が確認されていて、矢原遺跡群と呼ばれている。以下では、矢原遺跡群の弥生時代及び古代について歴史的環境を記載する。

矢原遺跡群では、発掘調査及び採集等で、赤彩を施した弥生土器片とそれに関連する遺構が確認されている。三枚橋遺跡では6次にわたる発掘調査で、弥生時代後期の集落跡や、櫛描波状文のある甕などの弥生土器を確認している（安曇野市教委2010）。八ツ口遺跡第2次発掘調査では、赤彩のある弥生土器が出土している（安曇野市教委2010）。

矢原遺跡群は、『倭名類聚抄』にある安曇郡八原郷、平安時代後期の矢原御厨に比定されている。馬場街道遺跡第1・2次発掘調査では、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、鉄器、灰軸陶器、青磁・白磁、山茶碗などの出土があり、古墳時代中期～後期、奈良時代、平安時代後半、中世の遺構が確認されている（長

^{よしま} 野県豊科建設事務所・徳高町教委 1987)。藤塚遺跡では、平成 19 年（2007）に実施した第 2 次発掘調査で古代の堅穴建物跡 25 棟を確認し、奈良～平安時代前半に比定した（安曇野市教委 2009）。ハツ口遺跡では、平成 20 年（2008）に実施した第 1 次発掘調査で、奈良～平安時代の堅穴建物跡 6 棟を確認した（安曇野市教委 2010）。^{あはらごうんばた} 矢原五輪畑遺跡では、平成 29 年（2017）に安曇野市教育委員会が実施した試掘調査で、掘出された弥生土器片や、外側ハケメの施された土師器甕等の奈良時代の遺物が出土した（安曇野市教委 2019）。

なお、三枚橋遺跡第 3 次発掘調査及び第 7 次発掘調査の調査地は、^{けんせいぎょうく} 研成義塾校舎の敷地東側にあたる。研成義塾は、キリスト教に基づいた人格主義教育を目指し、井口喜源治が明治 31 年（1898）に^{あしはたか} 東穂高村矢原集会所に創立、明治 34 年（1901）に調査地の新校舎建設により設立した。



第5図 三枚橋遺跡付近の遺跡（平成22年3月31日調整）

第2表 三枚橋遺跡付近の遺跡

No.	名称	種類	時代	No.	名称	種類	時代
2-34	宮脇遺跡	集落跡	弥生・平安・中世	2-47	三枚橋遺跡	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世
2-36	穂高神社境内遺跡	集落跡	弥生・奈良・平安	2-48	矢原五輪畑遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
2-37	北才の神遺跡	集落跡	古墳・平安	2-49	天原宮地遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安
2-38	藤塚遺跡	集落跡	古墳・平安	2-50	梅池遺跡	集落跡	縄文・平安
2-39	宗徳寺遺跡	集落跡	平安	2-51	西反田遺跡	集落跡	古墳・平安
2-40	芝宮南遺跡	集落跡	弥生・平安	2-52	正島遺跡	集落跡	縄文・中世
2-41	穂高高校北遺跡	集落跡	平安	2-53	馬場南遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
2-42	大坪沢遺跡	集落跡	平安	2-56	ハツ口遺跡	集落跡	奈良・平安・中世
2-43	南原遺跡	集落跡	弥生	2-57	柏原遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
2-44	長者池遺跡	集落跡	古墳・平安	2-59	堀之内遺跡	集落跡	古墳・中世
2-45	追廻遺跡	集落跡	平安	2-60	矢原市上遺跡	集落跡	古墳
2-46	天原神社東遺跡	集落跡	平安	2-61	弥之助塚遺跡	集落跡	平安

3 三枚橋遺跡の概要

三枚橋遺跡は、土師器、須恵器の破片が出土したことを契機として、平安時代の遺跡と認識されるようになった(南安曇郡誌改訂編纂会 1968、穂高町誌編纂委 1991)。過去に6次にわたる発掘調査が実施されている。

平成3年(1991)～平成14年(2002)に、穂高町教育委員会が第1～5次の発掘調査を実施し、合計約3,700㎡を調査した。第5次までに共通して、奈良～平安時代前半の集落跡を確認している。また第1・2・4次調査では、弥生時代の竪穴建物跡も確認した(未報告)。

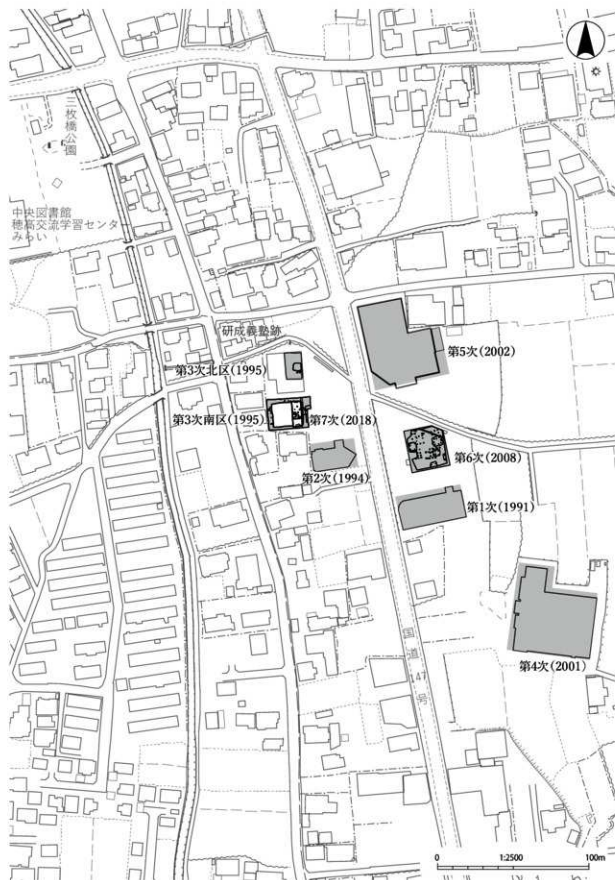
平成7年(1995)に、今回の調査地と接する箇所で行った三枚橋遺跡第3次発掘調査では、6棟の建物跡を確認した。奈良～平安時代の土師器、須恵器が出土したほか、今回の調査地の北側で、平安時代の灰軸陶器が出土している。

平成20年(2008)に、安曇野市教育委員会が第6次発掘調査を実施し、奈良時代前半～平安時代前半の竪穴建物跡を合計5棟確認した(安曇野市教委 2010)。竪穴建物跡のうち1棟は、西側に建物の入口施設と考えられる階段状の構造をもつ。他の遺構に比べ掘り込みが深く、高盤等の遺物も他の遺構と異なる特徴を備えているが、集落内での役割は不明である。また、遺構外から、縞波状文の施された弥生土器が出土している。

第7次発掘調査では、弥生時代の遺構・遺物は確認できなかったが、三枚橋遺跡は全体として弥生時代、及び奈良～平安時代の集落跡であると考えられる。

第3表 三枚橋遺跡発掘調査履歴

調査次	調査年	調査原因	遺構・遺物の概要	文献
第1次	平成3年 (1991)	店舗建設	竪穴建物跡(弥生5、奈良～平安12) 弥生土器、須恵器、土師器	未報告
第2次	平成6年 (1994)	店舗建設	竪穴建物跡(弥生1、奈良～平安4)、掘立柱建物跡(奈良～平安3)、人工河川、弥生土器、須恵器、土師器、石製品	未報告
第3次	平成7年 (1995)	店舗建設	竪穴建物跡(奈良～平安6)、須恵器、土師器、灰軸陶器、金属製品、石製品	作成中
第4次	平成13年 (2001)	店舗建設	竪穴建物跡(弥生4、奈良～平安11)、掘立柱建物跡(奈良～平安4)、溝跡、弥生土器、須恵器、土師器	未報告
第5次	平成14年 (2002)	店舗建設	竪穴建物跡(奈良～平安10)、掘立柱建物跡(奈良～平安6)、須恵器、土師器、墨書土器、転用硯、羽口	未報告
第6次	平成20年 (2008)	店舗建設	竪穴建物跡(奈良時代1、平安時代4)掘立柱建物跡1、土坑、ピット、弥生土器、須恵器、土師器、鉄製品、石製品	安曇野市教委2010
第7次	平成30年 (2018)	店舗建設	竪穴建物跡(奈良1、不明1)、焼土1、ピット、須恵器、土師器	本書



第6図 三枚橋遺跡発掘調査区配置図

第3章 調査の方法

三枚橋遺跡第7次発掘調査の調査原因である店舗建設の事業地が、周知の埋蔵文化財包蔵地内であり、平成29年（2017）に実施した試掘調査結果から、施工地に遺構が良好に残存していることを確認したため、記録保存のための発掘調査を念頭に事業者と保護協議を継続した。試掘結果から、遺構深度は約50cmで、当該工事での掘削によって埋蔵文化財への影響が不可避であることを確認したため、事業者と保護協議を再度実施し、発掘調査を実施して遺跡の記録保存を図ることとした。

発掘調査は、建物の基礎設置予定箇所のうち、平成7年（1995）の第3次発掘調査の調査区と重複しない範囲を対象とした。調査面積は90㎡である。記録作成にはグリッド法を採用した。店舗建設用の1辺5mの任意グリッドを利用し、調査員がトータルステーションを用いて調査地全体に1辺2mの調査用グリッドを設定した。グリッドは、真北から4.08度西へ傾く。なお、本件発掘調査の基準点測量では、世界測地系を採用している。遺構の所在、遺物の出土位置等は、この調査用グリッドを基本として記載した。また、標高の基準としてグリッド測量実施の際にベンチマークを設定した。ベンチマークには、事業者の設定した基準点（T-1、T-3）を使用した（第7図）。各基準点の座標は以下の通りである。

T-1 X=36954.381 Y=-54638.255 標高 539.830m

T-3 X=36929.010 Y=-54666.041 標高 539.900m

表土除去は、建設用重機を用いた。試掘調査で確認した遺構検出深度付近では、遺構が検出できなかったため、重機による掘削は地表下約1mまでとした。以深は遺構が検出されるまで人力により掘削した。

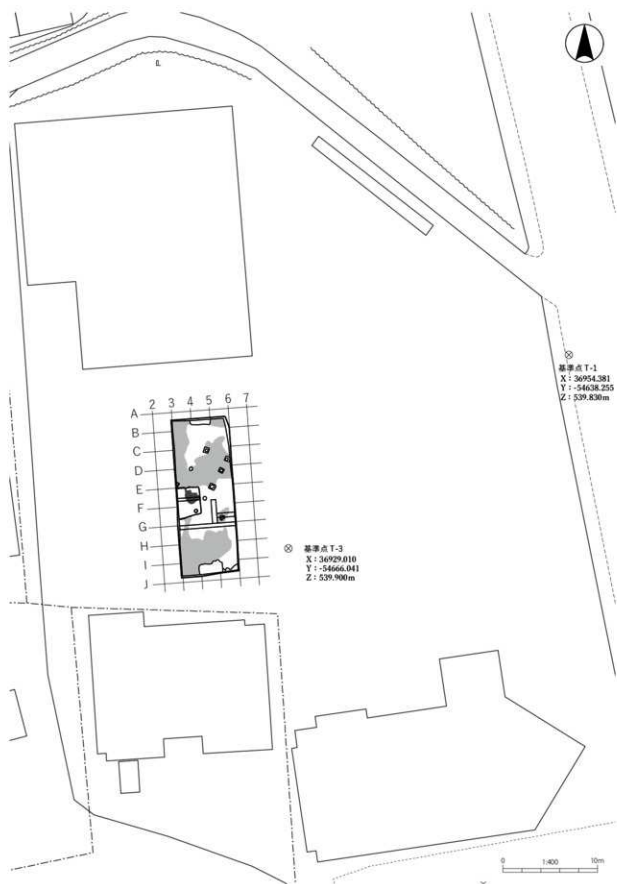
遺物の取り上げは、原則として遺構ごとに行った。遺構観測は調査用グリッドを基準として、調査員・作業員が現場で簡易遺方測量を実施した。記録写真は、現場・整理ともにデジタルカメラを使用した。

整理作業は、現場作業終了後に室内で行い、土器等の洗浄、注記、接合、実測、属性観察、図版作成・調整、写真撮影等及び報告書作成を行った。整理作業のうち自然科学分析は業者委託した。注記は、墨汁を使用し手書きで行った。なお、試掘調査出土遺物の注記は、インクジェット式の注記機器を使用した。

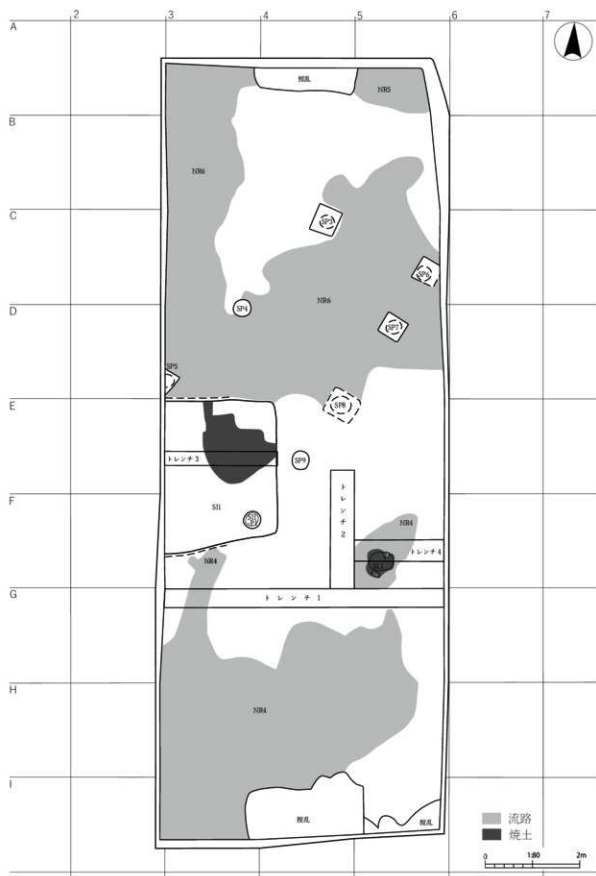
記載には、調査略号「SMB18」を使用し以下の例による。

第4表 遺物注記

内容	注記
出土位置記録遺物	SMB18 No.■ 遺構名・層名
出土遺構記録遺物	SMB18 遺構名・層名
試掘調査出土遺物	サンマイバシ シクツ トレンチ名 2017.12.5



第7図 グリッド配置図



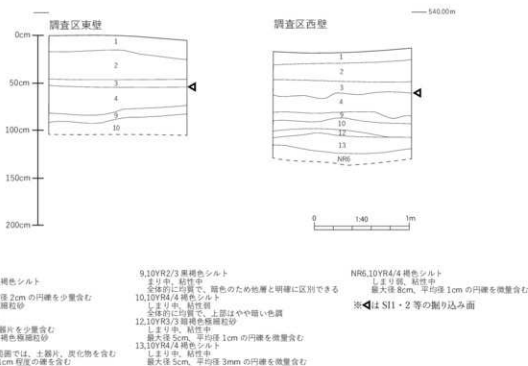
第8図 調査区全体図

第4章 層序

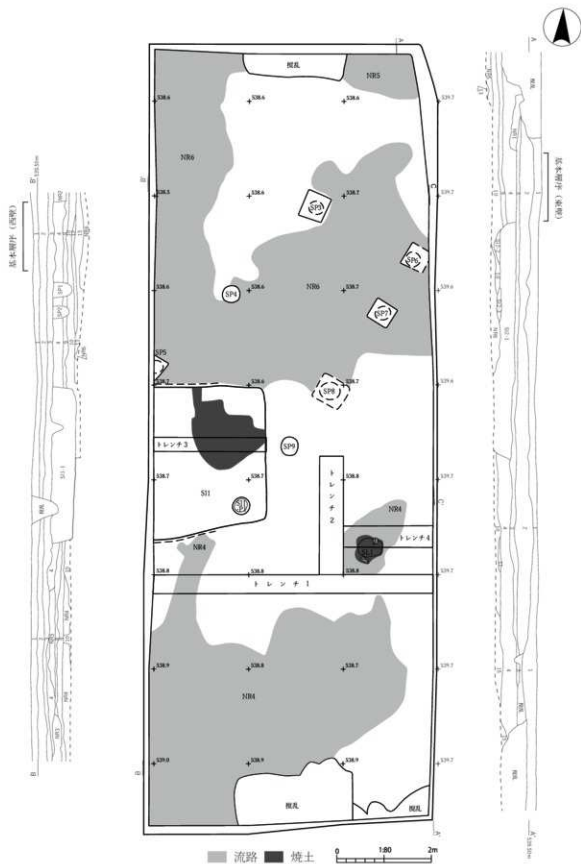
今回の調査では、地表面から深度約120cmまで掘削し、調査区の東壁と西壁において、セクション図を作成した。第9図に基本層序として第1～4・9・10・12・13層を示した。第8・11・15層は、第10図に記載した。試掘調査のみで観察した第5～7層と合わせ、計15層と、NRI～6の自然流路を確認した（第9・10図、第5表）。

第1層は造成土である。第2層はにぶい黄褐色シルト、第3層は酸化鉄の濃集する暗褐色極細粒砂である。第4層はにぶい黄褐色極細粒砂で、調査区東壁では、SI2から南へ100cmの範囲に、土器片、炭化物を含有していた。地表下約50cmの第4層上面で、SII・SI2・SP1・SP2の掘り込みを確認した。掘り込みはいずれも第9・10層に及ぶ。第9層は黒褐色シルトで、暗色で視認しやすく、調査区全体で確認できるため、鍵層として有効である。

また、第7次発掘調査終了後、店舗建設に際し工事立会を実施した。建物基礎の西側で土層を観察したところ、第7次発掘調査で確認した第4・9・7層を確認した。基礎の西側の部分では、第4層から、少量の摩耗した土器片・被熱した花崗岩・焼土・炭化物が出土した（第11図）。



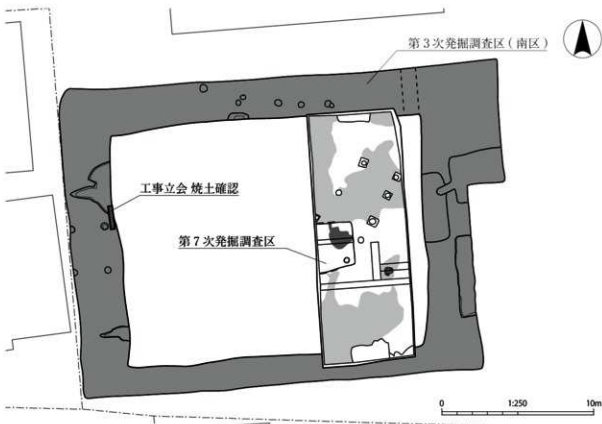
第9図 基本層序



第10図 東壁、西壁セクション図 ※C-C'断面は第13図参照

第5表 土層注記

層名	色調	土質	しまり	粘性	特徴
1	---	—	—	—	現代の造成土
2	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト	強	弱	最大径3cm、平均径2cmの円礫を少量含む
3	10YR3/3暗褐色	極細粒砂	中	弱	酸化鉄が濃集する 全体的に均質で、土層片を少量含む
4	10YR4/3にぶい黄褐色	極細粒砂	中	弱	S12の南約1mでは土層片、炭化物を含む 第11層直上では1cm程度の礫を含む
5	---	礫	弱	なし	最大径3cm、平均径5mmの円礫 礫支持で基質は粗粒砂 試験調査のみ確認
6	---	礫	弱	なし	最大径5cm、平均径50mmの円礫 基質支持で基質は粗粒砂 試験調査のみ確認
7	10YR4/3にぶい黄褐色	細粒砂	弱	弱	薄い中粒砂層と互層をなす 試験調査のみ確認
8	10YR3/3暗褐色	シルト	中	中	一部に径3mm程度の黒褐色シルト粒を含むが、全体的に均質
9	10YR2/3黒褐色	シルト	中	中	全体的に均質で、暗色のため地層と明確に区別できる
10	10YR4/4褐色	シルト	中	弱	全体的に均質で、上部はやや暗い色調
11	10YR3/3暗褐色	シルト	中	中	5cm程度の黄褐色シルトのブロックを含む
12	10YR3/3暗褐色	極細粒砂	中	中	最大径5cm、平均径1cmの円礫を微量含む
13	10YR4/4褐色	シルト	中	中	最大径5cm、平均径3mmの円礫を微量含む
14	10YR4/4褐色	細粒砂	中	弱	5cm程度の円礫を少量含む NR6の下位 トレンチ3のみ確認
15	10YR4/3にぶい黄褐色	細粒砂	弱	弱	上部に最大径5cm、平均径1cmの円礫を多く含む
NR1	10YR4/3にぶい黄褐色	礫	中	弱	最大径10cm、平均径1cmの円礫 礫支持で、基質は極細粒砂
NR2	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト	中	中	最大径4cm、平均径1cmの円礫を多く含む
NR3	10YR4/4褐色	礫	弱	中	最大径20cm、平均径2cmの重円礫 礫支持で、基質はシルト
NR4	10YR4/3にぶい黄褐色	礫	弱	中	最大径3cm、平均径3mmの重円礫～重角礫 礫支持で、基質はシルト 海抜高い
NR5	10YR5/4にぶい黄褐色	礫	中	中	最大径5cm、平均径1cmの礫 基質支持で、基質はシルト
NR6	10YR4/3にぶい黄褐色	礫	中	弱	最大径12cm、平均径2cmの円礫 礫支持で、基質は中粒砂 弱い定向配列あり



第11図 工事立会焼土確認箇所

第5章 遺構

三枚橋遺跡第7次発掘調査で確認された遺構は、堅穴建物跡2棟、帰属不明の焼土1基、ピットである。このうち堅穴建物跡 SII は、出土遺物から奈良時代に属すると考えられる。三枚橋遺跡では、過去に弥生時代の遺構を確認しているが、今回の調査では検出できなかった。以下にそれぞれの詳細を記載する。

1 堅穴建物跡

(1) SI 1 (第12図)

検出層位 第4層上面

位置 E3・E4・F3・F4グリッド

平面形・規模 調査区西壁にかかる箇所検出した遺構であり、調査区内では、北東隅と南東隅を確認した。断面観察により、SII は第4層上面から掘り込まれることを確認したが、掘り込み面では検出できなかったため、床面の範囲を第12図に図示した。点線は推定される上端の位置である。推定主軸方向はN4°Wである。南北約32mで、西端は調査区外のため、東西方向の全長は不明だが、調査区内では2.4mを測った。方形を呈すると推測できる。検出位置から、平成29年(2017)に実施した試掘調査のBトレンチで検出した遺構と焼土は、SII に帰属する可能性が高い。

壁・覆土 調査区西壁では、壁高約0.5mで、ほぼ垂直に立ち上がる。第7次発掘調査では、西壁の断面観察で覆土SII-1のみ確認した。また、試掘調査のBトレンチでは、覆土SII-1・2・3の3層を観察した。BトレンチのSII-2・3は焼土を含むため、SII の北側床面で確認した焼土と判断でき、西壁断面には分布しない。

床面 南東隅で、SII-P1のピット1基を確認した。SII の柱穴である可能性を念頭に、床面を精査したが、その他の柱穴は検出できなかった。遺構の北側の範囲で、ごく薄い焼土を検出した。煙道や袖石などカマドの可能性を示す構造は確認できなかった。遺構南東部では、遺物がまとまって出土した。

重複関係 重複する遺構はない。なお、北～北東隅ではNR6を掘り込む。

時期 出土土器から、松本盆地古代2期に比定できる。

(2) SI 2 (第13図)

検出層位 第4層上面

位置 C5・D5・E5グリッド

平面形・規模 調査区東壁で断面のみ確認し、平面形は不明である。南北約50mを測る。

壁・覆土 残存している壁高は、北側で約0.4mだが、南側では床面まで検出できなかったため不明である。壁は、南側は緩やかに立ち上がるが、北側ではやや緩やかに立ち上がった後、上部で垂直に近い傾斜となる。覆土は3層を確認した。

床面 床面遺構は確認していない。

重複関係 調査区内では、他の遺構との重複関係はない。

時期 出土土器がなく、帰属時期は不明である。

2 焼土

(1) SL 1 (第14図)

検出層位 NR4 上面

位置 F5 グリッド

平面形・規模 不規則な平面形の焼土として確認した。最大で南北約0.6 m、東西約0.5 mを測る。

床面 厚さ0.1 mで、被熱した礫2点を確認した。堅穴建物に属するカマドである可能性を考慮し、焼土周辺で煙道や建物跡の平面形の有無を精査したが、検出できなかった。

重複関係 調査区内では、他の遺構との重複関係はない。

時期 出土土器は破片のみで、時期を推定することはできなかった。

3 ビット

(1) SP 1・2 (第10図)

検出層位 SP1・2は調査区西壁で断面のみ確認した。第4層上面から、第9・10層を掘り込む。

位置 C3・D3 グリッド

平面形・規模 断面のみのため、不明である。

重複関係 調査区内では、他の遺構との重複関係はない。

時期 出土土器がなく、帰属時期は不明である。

(2) SP 3～9 (第15図)

検出層位 SP3・4・8・9を第10層上面で、SP5～7を流路NR6上面で検出した。SP4～8はNR6を掘り込む。SP5は調査区西壁にかかるため精査したところ、第13層を掘り込まないことを確認した。

位置 C3～5・D3～5・E4～5 グリッド

平面形・規模 SP3・5・6・7・8は方形であり、SP4・9は円形を呈する。SP6～9は、直線的に並んでいるほか、遺構間隔はSP6・7が1.4 m、SP7・8が2.0 m、SP8・9が1.4 mと規則的であり、一連のものと考えられる。しかし、SP3・4の遺構間隔は2.5 m、SP4・5の遺構間隔は2.2 mで、SP6～9の間隔と一致しない。したがって、平面的に組み合わせる柱穴が確認できなかったため、掘立柱建物跡と判断できずビット群として記録した。

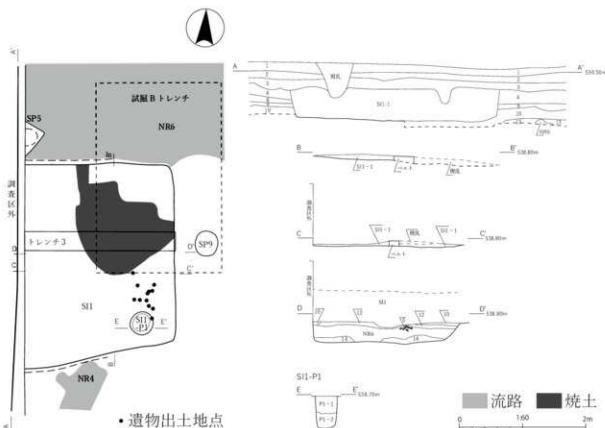
重複関係 調査区内では、他の遺構との重複関係はない。

時期 出土土器がなく、帰属時期は不明である。

4 自然流路

(1) 自然流路 (第10図)

今回の調査では、NR1～6の自然流路を確認した。NR1・2は、調査区北側に局所的に分布する流路である。NR1は調査区東壁で、NR2は調査区西壁で観察した。NR1・2は、ともに第4層に掘り込む流路で、検出面は、SII・2、SP1・2と同じ第4層上面である。NR4は、調査区東壁と南側で広く観察できた。NR4内の西側では礫が主体であり、東側は砂が主体的に露出した。SL1はNR4を掘り込んで構築されている。また、SII・2は第4層を掘り込むため、第4層下位のNR3～6は、SII・2の形成以前に堆積している。NR6は、第10層及び第13層の下位に位置し、一部でシルトを挟む礫層である。NR6は、トレンチ1内で礫の定向配列が確認でき、西から東へ流下したことを推測できる。



SII-1, 10YR3/3 暗褐色シルト
しまり中、粘性中
腐化した炭化物を少量含む
最大径 2cm、平均径 5mm の空円礫を微量含む

SII-P1
PI-1, 10YR4/5 褐色極細粒砂
しまり中、粘性弱
2cm 程度の円礫を微量含む
全体的に均質

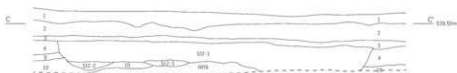
PI-2, 10YR5/4 に近い黄褐色粘土
しまり中、粘性強
5mm 程度の円礫を微量含む
全体的に均質

1. 造成土
2. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト
しまり強、粘性強
最大径 3cm、平均径 2cm の円礫を少量含む
3. 10YR3/3 暗褐色極細粒砂
しまり中、粘性強
腐化した炭化物を
4. 10YR4/3 に近い黄褐色極細粒砂
しまり中、粘性強
一部に径 0.3cm 程度の黒褐色シルト粒を含むが、
全体的に均質
9. 10YR2/3 黄褐色シルト
しまり中、粘性中
全体的に均質で、褐色のため地層と明確に
区別できる

10. 10YR4/4 褐色シルト
しまり中、粘性弱
全体的に均質で、上部はやや暗い色調
12. 10YR3/3 暗褐色極細粒砂
しまり中、粘性中
最大径 5cm、平均径 1cm の円礫を微量含む
13. 10YR4/4 褐色シルト
しまり中、粘性中
最大径 5cm、平均径 3mm の円礫を微量含む
14. 10YR4/4 褐色極細粒砂
しまり中、粘性弱
5cm 程度の円礫を少量含む
- NR6, 10YR4/4 褐色シルト
しまり強、粘性中
最大径 8cm、平均径 1cm の円礫を含む

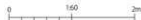
第12図 SI 1

調査区東壁

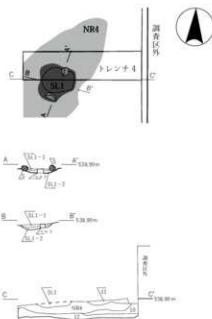


1. 造成土
 2. 10YR4/3 ぶい黄褐色シルト
しまり強、粘性弱
最大径 3cm、平均径 2cm の円礫を少量含む
 3. 10YR3/3 暗褐色極細粒砂
しまり中、粘性弱
酸化鉄が濃集する
全体的に均質、土層厚を少量含む
 4. 10YR4/3 ぶい黄褐色極細粒砂
しまり中、粘性弱
全体的に均質、土層厚を少量含む
SI2 の直下の 1m の範囲では、土層厚、炭化物を含む
厚 11 層厚までは 1cm 程度の礫を含む
 9. 10YR2/3 黒褐色シルト
しまり中、粘性弱
全体的に均質で、層色のため地層と明確に区別できる
 10. 10YR4/4 褐色シルト
しまり中、粘性弱
全体的に均質で、上部はやや暗い色調
- NR6, 10YR4/3 ぶい黄褐色礫
しまり中、粘性弱
礫支持で、基質は中粒砂
最大径 12cm、平均径 2cm の円礫からなる
弱い定向配列を有す

- SI2-1, 10YR3/3 暗褐色シルト
しまり中、粘性中
最大径 5cm、平均径 3cm の歪円礫～円礫を微量含む
遺物片、炭化物を微量含む
- SI2-2, 10YR4/3 ぶい黄褐色シルト
しまり中、粘性中
10YR3/3 暗褐色シルトが混ざるが、輪郭は不明瞭
炭化物を SI2-1 よりやや多く含む
- SI2-3, 10YR3/3 暗褐色シルト
しまり中、粘性中
10YR2/2 暗褐色粘土が上部にシート状に存在する

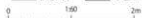


第13図 SI2 ※C-C' の位置は第10図参照

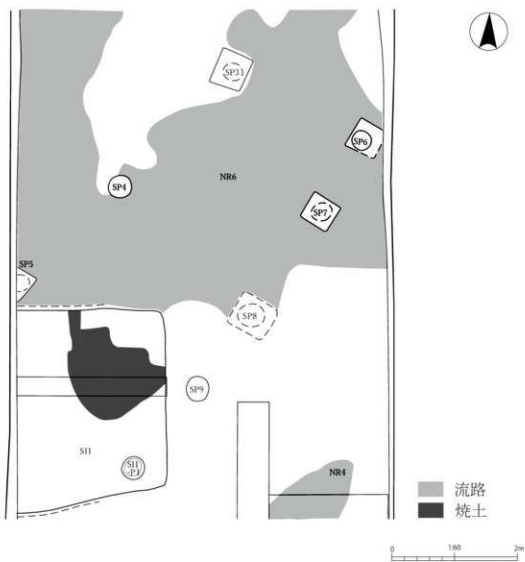


- SL1-1, 7.5YR4/4 褐色粘土
しまり中、粘性弱
土層厚、炭化物を含む
礫土を含む
- SL1-2, 10YR3/3 暗褐色礫
しまり中、粘性弱
最大径 4cm、平均径 1cm の円礫からなる
基質は細粒砂で基質支持
礫土を含む
- 10, 10YR4/4 褐色シルト
しまり中、粘性弱
全体的に均質で、上部はやや暗い色調
- 11, 10YR3/3 暗褐色シルト
しまり中、粘性中
5cm 程度の黄褐色シルトのブロックを含む
- 12, 10YR3/3 暗褐色極細粒砂
しまり中、粘性中
最大径 5cm、平均径 1cm の円礫を微量含む
- NR4, 10YR4/3 ぶい黄褐色礫
しまり弱、粘性中
礫支持で、基質はシルト
最大径 5cm、平均径 3mm の歪円礫～歪角礫からなる
面状が高い

■ 流路 ■ 焼土



第14図 SL1



第15図 SP3・SP4・SP5・SP6・SP7・SP8・SP9

第6章 遺物

三枚橋遺跡第7次発掘調査では、1棟の竪穴建物跡（SII）と焼土（SL1）から奈良～平安時代の遺物が出土した。SII 出土遺物のうち3点と、遺構外から出土した遺物6点を資料化した。SL1の出土遺物は資料化できなかった。また、平成29年（2017）に実施した試掘調査では、Bトレンチから遺物が出土し、うち17点を資料化した。以下に、各資料の特徴を記載する。なお、土器・施釉陶器の記載については、中央自動車道関連埋蔵文化財発掘調査の所見（小平1990）を基本に、以下のとおり分類した。土器・施釉陶器の種類は、土師器、須恵器、灰軸陶器に大別した。また、土器・施釉陶器の種類は用途に応じて、食膳具、煮炊具、貯蔵具に分類し、器種を設定した（第6表）。

1 第7次発掘調査

三枚橋遺跡第7次発掘調査では、SII からまとまった量の土器類が出土し、3点を資料化した。SL1から出土した遺物は資料化できるものはなかったが、ハケメの施された甕の破片が含まれていた。以下に、SIIの出土遺物3点と、検出時に得られた土器類6点について記載する（第16図）。

(1) SII

1～3は、いずれもSIIの床面からまとまって出土した。1は、外面、内面ともにナデ調整された小型甕Aである。2、3は外面にハケメを施す小型甕Bであり、3の外面のハケメは底部付近まで及ぶ。3の底部はナデ調整されている。松本盆地古代2期の特徴がみられる。

(2) 遺構外

4～9は、検出時に得られた遺物である。4は、底部に回転糸切痕の残る無台の須恵器坏Aである。5は、灰軸陶器の皿の口縁部破片である。軸は全体的に薄く、ハケ塗りだが、一部剥離している。6は、甕の底部破片である。内面は、幅1cm、6条1単位のハケメが施されている。外面は、ナデ調整である。7は、小型甕Bの破片で、外面の頸部は横方向のナデ、体部は縦方向のハケメが施される。8は、須恵器甕の破片である。外面にタタキ目が残るが、内面はナデ調整されている。9は、体部より上が欠損しているが、須恵器長頸甕の底部と判断した。高台は貼り付けで、高台の内側0.5cmの範囲がヘラケズリ調整されている。6、7はSII出土土器と同時期の可能性が高い。5の灰軸陶器は、^{ひかりが丘}光ヶ丘1号窯式の特徴を有し、7～9期のものと判断できるため、調査区周辺に7～9期の遺構が存在する可能性がある。

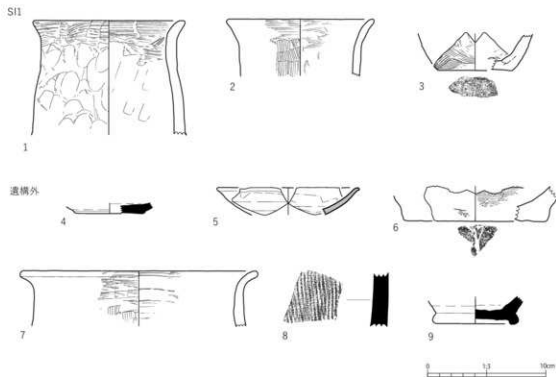
第6表 器種分類

種類	種別	器種	説明
食器具	須臾器	器A	ロクロ成形で、高台の付環。
		器B	ロクロ成形で、高台の付環。
		器C	ロクロ成形の坏で、残存状態が悪く、高台及び底部が確認できないもの。
		器蓋B	ロクロ成形の坏蓋で、口縁端部を折り曲げるもの。
		器蓋	ロクロ成形の坏蓋で、残存状態が悪く、口縁部が確認できないもの。
回転陶器	器	ロクロ成形で、直線的に伸びる扁平な体部をもつ。	
煮炊具	土鍋器	器B	器面をハケメで調整する長胴甕。
		器F	器面をミガキで調整する球胴甕。
		器G	器面をハケメで調整する球胴甕。
		甕	甕のうち、残存状態が悪く詳細な形態が不明瞭なもの。
		小型甕A	器面をナデで調整する小型の甕。
		小型甕B	器面をハケメで調整する小型の甕。
貯蔵具	須臾器	円筒形土器	体部の直径1.5cm前後の円筒形を呈するもので、外部外面をハケ調整する。
		器A	大きく外反する頸部をもつもの。
		甕	甕のうち、残存状態が悪く詳細な形態が不明瞭なもの。
		長胴甕	長胴甕だが、残存状態が悪く詳細な形態が不明瞭なもの。

2 平成29年度試掘調査

試掘調査での出土土器は、17点を資料化した（第17図）。全てBトレンチから出土した。1は、口縁端部を折り曲げた坏蓋Bである。口径は11.4cmを測り、やや小型である。2・3は、端部の欠損した坏蓋である。2の頂部は剥離しており、剥離面の状態から、焼成時につまみが欠損した可能性がある。4は、底部に回転糸切痕を残す須臾器坏Aである。5は、外側に張り出す高台を持つ須臾器坏Bで、底部は回転ヘラケズリである。6は、須臾器坏の口縁部で、体部がやや膨らみ、口縁付近で緩やかに外反する。口径は15.4cmに復元できる。底部が欠損しているため、高台の有無は不明である。7・8は体部の内外面にハケメが施される甕Bである。7の外面のハケメは、縦方向に体部上半から下方へ連続し、頸部はナデ調整されている。7・8は接合できなかったが、胎土の様子や器形から、同一個体の可能性がある。8は、内外ともに縦方向に長いハケメ調整を施す。また、8の外面には炭化物が付着していたため、試料を採取し、放射性炭素年代測定を実施した（第7章）。9は甕Fで、頸部の外面はケズリが、体部の内外面はミガキが施されている。10・11は甕の底部で、体部への立ち上がりが球状に大きく開くことから、球胴の甕Gと判断した。10・11ともに底部に木葉痕を残す。10の底径は8.8cmに復元でき、やや小型である。12・13は、口径が小さく、ずんぐりした器形で、内外面ともにナデ調整が主体的であるため、小型甕Aとした。14は、内面ハケ調整の小型甕Bである。外面、底面ともにナデ調整で、木葉痕は確認できない。15は、円筒形土器の口縁部である。外面は、丁寧にナデ調整された後ハケメが施されている。内面は横方向のミガキ調整である。16は、大きく外反する須臾器甕Aの頸部で、外面に幅1.1cm、4条1段の櫛描波状文が施される。17は、外面にタタキが明瞭に残る甕の体部である。内面の当具痕はナデ消されている。

1の坏蓋B、5の底部が回転ヘラケズリの坏B、7・8のハケ調整のある甕、9～14の小型甕と甕F・甕Gなど、松本盆地古代2期の特徴を有する土器が多い。4・6の坏は、松本盆地古代2期より若干時代が下る特徴がみられるが、破片が小さいため断定はできない。

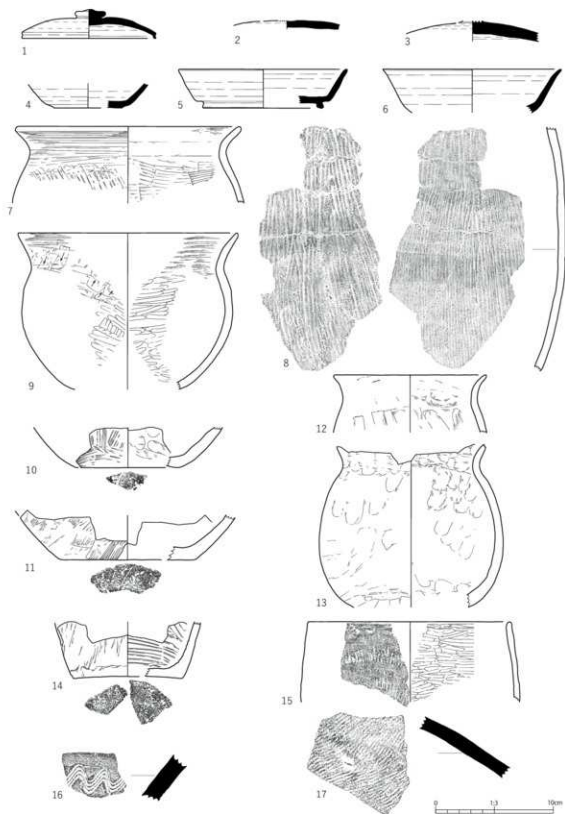


第16図 第7次発掘調査出土土器

第7表 第7次発掘調査出土土器観察表

No.	出土位置	層位	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	実測 径元	胴部径 (cm)	実測 径元	最大径 (cm)	実測 径元	最大径 部位	口径 (cm)	実測 径元	器高 (cm)	技法の特徴	内面	底面
1	S11	Ⅱ	土師器	小型甕A	口縁部～ 体部	22.4	径元	11.4	径元	23.0	径元	(体部)	不明	-	10.7	ナデハケ	工具ナデ ハケ	不明
2	S11	Ⅱ	土師器	小型甕B	口縁部～ 体部	22.0	径元	10.4	径元	22.0	径元	(口縁部)	不明	-	14.8	ナデハケ	ナデハケ	不明
3	S11	Ⅱ	土師器	小型甕B	体部～底面	不明	-	不明	-	9.6	径元	(体部)	6.4	径元	13.1	ハケ	ナデ	ナデ
4	遺構外	不明	須恵器	卍A	体部～底面	不明	-	-	-	7.3	径元	(体部)	6.0	径元	10.3	ロクロナデ	ロクロナデ	円盤未切
5	遺構外	不明	灰緑陶器	壺	口縁部～ 体部	11.6	径元	-	-	11.6	径元	(口縁部)	不明	-	12.3	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
6	遺構外	不明	土師器	甕	体部～底面	不明	-	不明	-	13.8	径元	(体部)	12.0	径元	13.6	ナデ	ハケ	木葉痕
7	遺構外	不明	土師器	小型甕B	口縁部～ 体部	19.8	径元	17.2	径元	19.8	径元	(口縁部)	不明	-	14.7	ナデハケ	ナデ	不明
8	遺構外	不明	須恵器	甕	体部	不明	-	不明	-	不明	-	不明	不明	-	不明	タタキ	ナデ	不明
9	遺構外	不明	須恵器	長頸甕	体部～底面	不明	-	不明	-	7.9	径元	(体部)	7.2	径元	12.3	ロクロナデ	ロクロナデ	円盤未切 ハケナデ

※ () は残存する部分及び法数



第17図 試掘調査出土土器

第8表 試掘調査出土土器観察表

No.	出土位置	層位	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	実測 /復元 (cm)	明部径 (cm)	実測 /復元 (cm)	最大径 (cm)	実測 /復元 (cm)	最大径 部位	底径 (cm)	実測 /復元 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴	外面	内面	底部
1	試掘 北トレンチ	不明	炊飯器	中蓋B	縁部	11.4	実測	-	-	11.4	実測	口縁部	-	-	2.5	ロクロナデ 手挽(ナデ) ナデ	ロクロナデ	-	-
2	試掘 北トレンチ	不明	炊飯器	中蓋	縁部	不明	-	-	-	9.0	復元	(体部)	-	-	16.9	ロクロナデ 手挽(ナデ)	ロクロナデ	-	-
3	試掘 北トレンチ	不明	炊飯器	中蓋	縁部	不明	-	-	-	11.1	復元	(体部)	-	-	11.0	ロクロナデ 手挽(ナデ)	ロクロナデ	-	-
4	試掘 北トレンチ	不明	炊飯器	中A	縁部～底部	不明	-	-	-	10.2	復元	(体部)	3.8	復元	12.1	ロクロナデ	ロクロナデ	手挽(高型)	-
5	試掘 北トレンチ	不明	炊飯器	中B	口縁部～ 底部	14.4	復元	-	-	14.4	復元	口縁部	15.2	復元	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	手挽(ナデ)	-
6	試掘 北トレンチ	不明	炊飯器	中	口縁部～ 縁部	15.4	復元	-	-	15.4	復元	口縁部	不明	-	13.7	ロクロナデ ナデ	ロクロナデ	-	-
7	試掘 北トレンチ	不明	上飯器	器B	口縁部～ 縁部	19.2	復元	16.7	復元	19.6	復元	(体部)	不明	-	16.10	ナデハタ	ナデハタ	不明	-
8	試掘 北トレンチ	不明	上飯器	器B	縁部	不明	-	不明	不明	不明	不明	不明	不明	-	26.7	ハタ	ハタ	不明	-
9	試掘 北トレンチ	不明	上飯器	器B	口縁部～ 縁部	16.6	復元	16.4	復元	16.6	復元	(口縁部)	不明	-	13.20	ナデ(高型) ナデ	ナデ(高型)	不明	-
10	試掘 北トレンチ	不明	上飯器	器C	縁部～底部	不明	-	不明	-	16.0	復元	(体部)	6.8	復元	13.4	ハタ	ナデ	木製板	-
11	試掘 北トレンチ	不明	上飯器	器C	縁部～底部	不明	-	不明	-	16.2	復元	(体部)	11.4	復元	13.0	ハタ	ナデ	木製板	-
12	試掘 北トレンチ	不明	上飯器	小型器A	口縁部～ 縁部	12.8	復元	12.0	復元	12.8	復元	(口縁部)	不明	-	4.40	ナデ	ナデ	不明	-
13	試掘 北トレンチ	不明	上飯器	小型器A	縁部～体部	不明	-	11.6	復元	13.6	復元	体部	不明	-	13.8	ナデ ナデ(高型)	ナデ	不明	-
14	試掘 北トレンチ	不明	上飯器	小型器B	縁部～底部	不明	-	不明	-	12.4	復元	(体部)	6.2	復元	4.80	ナデ	ナデハタ	ナデ	-
15	試掘 北トレンチ	不明	上飯器	円筒形土 器	口縁部～ 縁部	17.2	復元	-	-	16.8	復元	(体部)	-	-	16.8	ナデハタ	土器	-	-
16	試掘 北トレンチ	不明	炊飯器	器A	縁部	不明	-	不明	不明	不明	-	不明	-	-	13.8	ロクロナデ 手挽(ナデ)	ロクロナデ	不明	-
17	試掘 北トレンチ	不明	炊飯器	器	縁部	不明	-	不明	-	不明	-	不明	-	-	16.4	ナデ	ナデ	不明	-

※ () は残存する部分及び法量

第7章 自然科学分析

1 放射性炭素年代 (AMS測定)

株式会社加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

三枚橋遺跡は、長野県安曇野市穂高 1800 番 1 外、同 2 に所在し、飛騨山脈から松本盆地東側へ流れる烏川の扇状地扇央に立地する。測定対象試料は、2017 年の試掘調査 B トレンチで出土した土器付着物である (第 9 表、第 17 図 8)。土器付着物試料は、土師器長胴甕の体部外面から採取した。土器付着物試料が採取された甕の時期は詳しく捉えられないが、周辺では奈良時代と見られる土器が出土している。

(2) 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 $1\text{mol}/\ell$ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第 9 表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(3) 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(4) 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (第 9 表)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した

値を第9表に、補正していない値を参考値として第10表に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第9表に、補正していない値を参考値として第10表に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す(第19図)。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第10表に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

第9表 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-190609	試料3	2017年試験調査 B トレンチ 壘 体部外面	土器付着物	AaA	-26.19 \pm 0.15	1,350 \pm 20	84.53 \pm 0.23

[IAA登録番号: #9732]

第10表 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-190609	1,370 \pm 20	84.33 \pm 0.23	1,350 \pm 22	653calAD - 672calAD (68.2%)	643calAD - 690calAD (94.8%) 754calAD - 758calAD (0.6%)

[参考値]

(5) 測定結果

測定結果を第9・10表に示す。

2017年試掘調査で出土した土器付着物試料の¹⁴C年代は1350±20yrBP、暦年較正年代(1σ)は653～672cal ADの範囲で示される。推定よりやや古い結果となった。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

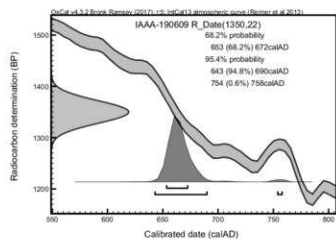
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363



第18図 分析試料 (第17図⑧)



第19図 暦年較正年代グラフ

第8章 調査の総括

三枚橋遺跡第7次発掘調査では、店舗建設に際し、調査面積90m²の発掘調査を実施した。調査の結果、竪穴建物跡2棟（SII・2）、焼土1基（SL1）、ピットを確認した。

1 堆積状況と遺構

今回の第7次発掘調査と試掘調査で、深度約120cmまで掘削し第2～15層と、NR1～6の自然堆積を確認した。遺構検出面は第4層上面で、地表面からの深度は約50cmである。NR3～6は、第4層より下位の流路で、SII・2の遺構形成以前に堆積している。SII・2は、NR6を掘り込み、SL1はNR4を掘り込んでいる。SII・2とNR1・2は、ともに第4層上面から掘り込んでいる。今回の調査では、遺構を切る流路は検出できず、遺構存続期と同時期に存在した流路は確認できなかったが、遺構構築以前から、少なくとも4本の自然流が存在したことから、調査地は頻繁に自然流の影響を受ける場所であったと判断できる。

三枚橋遺跡を含む矢原遺跡群では、自然流が遺構に影響を及ぼした例を挙げられる。矢原遺跡群の馬場街道遺跡第1・2次発掘調査、藤塚遺跡第2次発掘調査、八ツ口遺跡第2次発掘調査では、調査区内に自然流路跡が認められ、遺構の一部流失、または遺構上での砂礫の堆積を確認した（長野県豊科建設事務所・穂高町教委1987、安曇野市教委2009、2010）。

安曇野市教育委員会は、穂高神社境内遺跡第1次発掘調査において、調査区内で遺構が部分的に流失していることを受けて、縦堰の影響を指摘した（安曇野市教委2018）。縦堰は、烏川を利用した半自然流の用水路で、古代から水の乏しい烏川扇状地の水利を得るため利用されたと考えられている（小穴1987）。同調査地の南側では、本沢・芝沢といった縦堰が東流し、それらの水系によるものと判断している。三枚橋遺跡第7次発掘調査地の北側でも、縦堰の大坪沢が流下しており、本調査で確認された流路も同様に縦堰の影響による可能性が高い。

安曇野市教育委員会は、上記の報告の中で、穂高神社境内遺跡を含む扇状地北側の遺跡群と、扇状地南側の矢原遺跡群の遺構深度の違いを指摘した（安曇野市教委2018）。穂高神社境内遺跡第1次発掘調査で確認した、奈良・平安時代の遺構深度は150cmであり、同じく扇状地北側に位置する等々力町巾上巾下遺跡第1次発掘調査では、奈良時代の遺構深度が230cmと深い（未報告）。

一方、前述の矢原遺跡群の馬場街道遺跡第1・2次発掘調査、藤塚遺跡第2次発掘調査、八ツ口遺跡第2次発掘調査の例では、奈良・平安時代の遺構深度は約50cmである。今回の調査地から国道147号を挟み、南東へ約90mの位置で実施された三枚橋遺跡第6次発掘調査でも、造成時の碎石を除くと、奈良・平安時代の遺構深度は約70cmである。安曇野市教育委員会が実施した、平成29年（2017）の矢原五輪畑遺跡の試掘調査、平成31年（2019）の藤塚遺跡、追堀遺跡の工事立会で確認した、古墳後期～平安時代の遺構深度も、最大で90cmである（第20図）（安曇野市教委2019、2020）。今回の調査では、深度約50cmで遺構を検出したため、扇状地北側の等々力町巾上巾下遺跡、穂高神社境内遺跡のように100cmを超える深い検出面ではなく、他の矢原遺跡群と同程度の遺構深度であることが判明した。扇状地北側と南側での、この堆積

状況の傾向の確認について、奈良・平安時代の遺構構築深度と、遺跡の立地の関係を念頭に、今後も継続して調査成果を重ねていく必要がある。

2 遺構と遺物

今回の調査で、SI1 から出土した土器で資料化できたものは3点のみで、これらは松本古代盆地2期の特徴がみられる。SI1 の出土土器は、遺構の床面でまとまって出土したことから、遺構の廃絶時期を示すと考えられる。平成29年(2017)に実施した試掘調査では、SI1 と平面的に重複する位置のBトレンチで、松本盆地古代2期の要素のある土師器、須恵器が出土した。Bトレンチでは、シルトを掘り込む遺構と、焼土が確認でき、SI1 の位置、焼土範囲と一致している(第21図)。従って、SI1 の出土土器と、Bトレンチの遺物で2期の要素のある須恵器坏及び坏蓋、土師器甕類とは同時期の可能性が高い。

Bトレンチから出土した土器付着物の放射性炭素年代測定では、1 σ で7世紀第3四半期(653～672calAD, 68.2%)、2 σ で7世紀中頃～末(643～690calAD, 94.8%)という結果が得られた(第10表)。分析に供した試料は、第17図8の長胴甕に付着した炭化物である。この長胴甕はSI1 に帰属する可能性が高く、測定した年代は、SI1 の存続期間の一時期を示すと考えるのが妥当である。

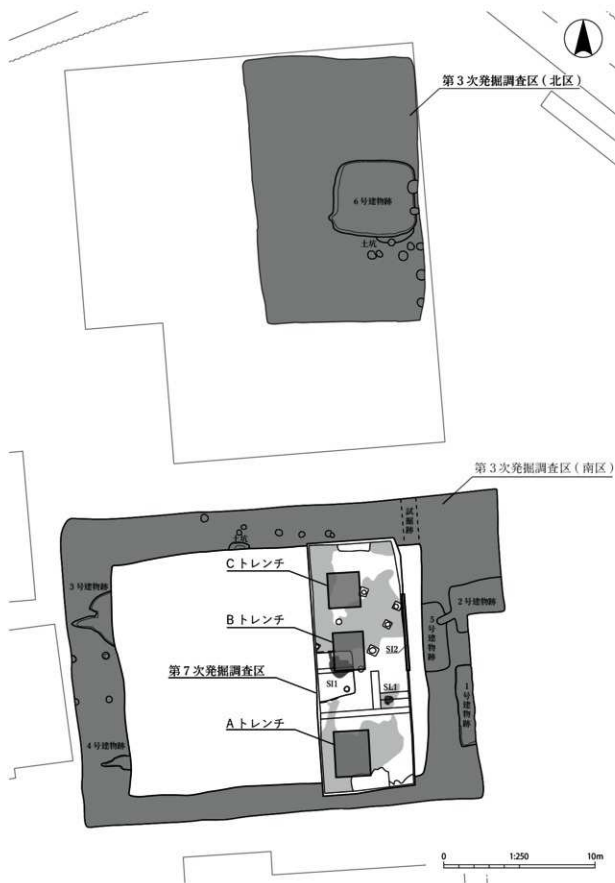
平成7年(1995)に、今回の調査地と接する箇所で行った三枚橋遺跡第3次発掘調査では、6棟の竪穴建物跡を確認した(第21図)。奈良～平安時代の土師器、須恵器が出土したほか、平安時代の灰軸陶器が出土している(報告書作成中)。遺構のうち5号建物跡は、第7次発掘調査で確認したSI2 と同一の可能性が高い。5号建物跡では、床面から古墳後期～奈良時代と推定できる甕類が出土した。その他に、平安時代とみられる内面黒色土器の坏と碗、軟質須恵器の坏の破片が得られている。古墳後期～奈良時代と推定できる甕類が床から出土していることから、5号建物跡及びSI2 の存続時期は古墳後期～奈良時代と考えられる。

また、今回の調査で、遺構外から得られた灰軸陶器の帰属する遺構は不明である。第3次発掘調査では、4期以降の遺物の破片が得られていることから、付近に平安時代の遺構が存在する可能性がある。平成20年(2008)に実施した三枚橋遺跡第6次発掘調査では、1～2期の甕や小型甕を伴う竪穴建物跡1棟が見つかったほか、3期以降の遺物を伴う竪穴建物跡を確認している(安曇野市教委2010)。以上のとおり、調査地の直近には、第7次発掘調査のSI1 と同時期と推定できる遺構と、後の時期の遺構が確認されている。第7次発掘調査で確認した遺構は少なく、共存する遺物も限られているため、集落の時間的、地理的広がりを検討するのは難しい結果となった。しかし、着実に調査結果の蓄積が進んでいるため、今後の調査で解明されていくことを期待する。

また、三枚橋遺跡では、第1～6次の調査で、弥生時代の遺構と遺物が確認されているが、今回の第7次発掘調査では、弥生時代の遺構・遺物は確認できなかった。調査地では弥生時代の遺構は構築されなかった可能性や、前項で述べたとおり、自然流の影響を受けて、弥生時代の遺構がより地下深くに埋没している可能性等が考えられ、課題として残った。



第20図 三枚橋遺跡周辺の古代の遺構深度



第21図 第3・7次発掘調査区、試掘調査トレンチ配置図



1 調査区全景（上が西）



2 調査区全景（北から）



3 調査区全景（西から）



4 完掘状況（北東から）



5 完掘状況 (南西から)



6 調査前 (西から)



7 基本土層 (西壁)



8 S11完掘 (南から)



9 S11断面 (東から)



10 SL1遺物出土状況（北から）



11 SL2断面（東壁）



12 SL1検出（上が東）



13 SL1セクション（西から）



14 SL1完掘（西から）



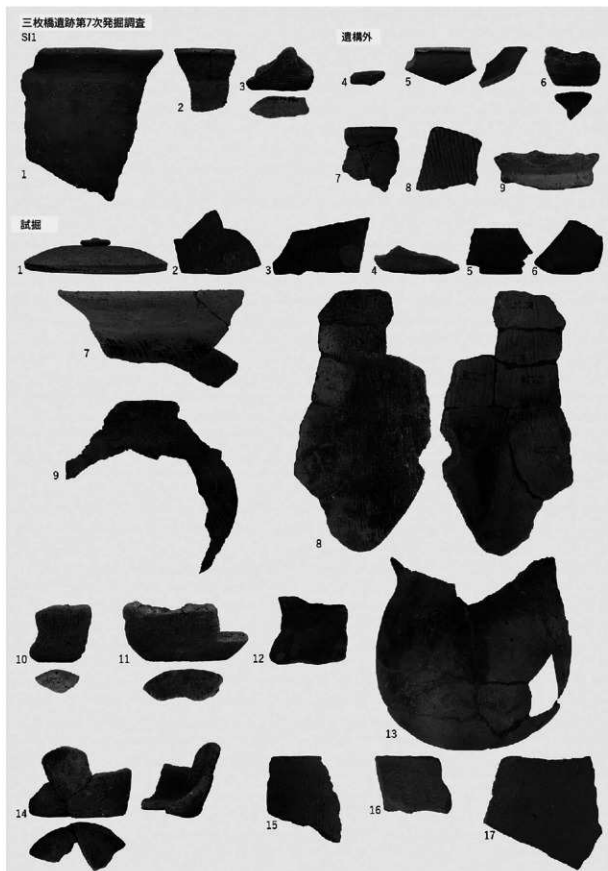
15 SP3~9（南から）



16 工事立会時土層（東壁）



17 調査後現況（東から）



引用・参考文献(五十音順)

- 安曇野市教育委員会 2009 「三枚橋・藤塚遺跡-安曇野市穂高交流学習センター建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」安曇野市の埋蔵文化財第2集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2010 「平成20年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書-ハツロ遺跡・三枚橋遺跡-」安曇野市の埋蔵文化財第3集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2018 「穂高神社境内遺跡1-新穂高支所建設事業に伴う第1次発掘調査報告書-」安曇野市の埋蔵文化財第14集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2019 「平成29年度安曇野市埋蔵文化財調査報告書」安曇野市の埋蔵文化財第17集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2020 「平成30年度安曇野市埋蔵文化財調査報告書」安曇野市の埋蔵文化財第19集 安曇野市教育委員会
- 小穴喜一 1987 「土と水から歴史を探る-古代・中世の用水路を軸として-」 信毎書籍出版センター
- 小平和夫 1990 「古代の土器」 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4-松本市内その1-総論編」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4 長野県教育委員会 pp.97-158
- 長野県豊科建設事務所、穂高町教育委員会 1987 「古墳時代~中世を主とした複合遺跡 矢原遺跡群(馬場街道遺跡)-県道柏矢町~田沢停線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告-」 長野県豊科建設事務所、穂高町教育委員会
- 穂高町誌編纂委員会編 1991 「穂高町誌」第2巻(歴史編上・民俗編) 穂高町誌刊行会
- 南安曇郡誌改訂編纂会 1968 「南安曇郡誌」第二巻上 南安曇郡誌改訂編纂会

調査報告書抄録

ふりがな	さんまいばいせいせき7							
書名	三枚橋遺跡7							
副書名	店舗建設に伴う第7次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	安曇野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	横山幸子、山下泰永、株式会社加速器分析研究所							
編集機関	安曇野市教育委員会							
所在地	〒399-8281 長野県安曇野市豊科 6000 番地 TEL.0263-71-2000							
発行年月日	西暦 2020 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
三枚橋遺跡 (第7次)	長野県安曇野市穂高 1800 番 2 外	20220	2-47	36° 19' 52"	137° 53' 27"	20181019 ～ 20181031	90 ㎡	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三枚橋遺跡	集落跡	奈良時代 平安時代	堅穴建物跡 2 焼土 1 ピット	土師器、須恵器、灰釉陶器		地表下 50cm で奈良時代の集落跡を確認した。		
要約	三枚橋遺跡は、鳥川扇状地に所在する集落跡である。過去に6次にわたる発掘調査を実施し、弥生時代の集落跡、奈良～平安時代前半の堅穴建物跡や掘立柱建物跡を確認している。今般、店舗建設に先立ち試掘調査を実施したところ、埋蔵文化財が良好に残存していることを確認したため、第7次発掘調査を実施した。発掘調査では、地表下50cm で堅穴建物跡2棟を確認し、うち1棟は松本盆地古代2期の遺構の可能性が高いことを明らかにした。また、遺構外から、松本盆地古代7～9期の遺物が出土しており、周囲に当該期の遺構が存在している可能性が高いと推測した。							

安曇野市の埋蔵文化財第 20 集
三枚橋遺跡 7
店舗建設に伴う第 7 次発掘調査報告書

発行 令和 2 年 (2020) 3 月 31 日
安曇野市教育委員会
〒399-8281 長野県安曇野市豊科 6000 番地
電話 0263-71-2000

編集 安曇野市教育委員会
印刷 株式会社ブラルト

